



Title	終助詞類のアクセントとイントネーション：「よ」「か」「の」「な」「でしょ（う）」「じゃない」、とびはね音調の「ない」
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 13-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69989
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

終助詞類のアクセントとイントネーション

—「よ」「か」「の」「な」「でしょ(う)」「じゃない」, とびはね音調の「ない」—

郡 史郎

要旨 首都圏中心部の話し方を対象として、終助詞の「よ」「か」「の」「な」「でしょ(う)」「じゃない」の高さの動きの付け方を、会話資料における用例を中心に検討し記述した。「とびはね音調」の「ない」も終助詞相当表現と見て、検討の対象に含めた。

1 本稿の目的

終助詞と、それに近い働きをする「でしょ(う)」「じゃない」などの文末表現を含めてここでは終助詞類と呼ぶ。郡(2016a)で利用した首都圏中心部生育話者による120分の会話資料(女性の会話量の方が多い)では、平均すると約6秒に1回の割合で終助詞類が使われている。特に「ね」、次いで「よ」の使用が他を引き離して多い。「か」「の」がそれに続く¹⁾。

終助詞類はさまざまな高さの動きを付けて使われ、高さの動きを変えることで、発話時の話し手の気持ちの細かな違いを伝える。高さの動きの使い方には、終助詞類の付かない裸の文末での使い方とは異なる点がある。日本語文法の解説書や日本語教育用の参考書には、用法と高さの動きの間に明確な対応関係があるかのように書かれていることがある。しかし、実例を見ればすぐわかるように、実際はそのような単純なものではない。

終助詞の用法と高さの動きの関係の本格的な記述はすでに轟木靖子(2008)と大島デイヴィッド義和(2013)にある。ただ、そこに示されているのは典型的な言い方と言うべきものであって、実際の会話資料にはそれらの記述にない言い方が出てくる。本稿では、東京など首都圏中心部成育の話者による会話にあらわれる用例を見ながら、聴取実験と対面調査の結果も参考にして、轟木、大島論文を補完する記述をおこなうのが目的である。

「ね」についてはすでに郡(2016b)で報告したので、この稿では、「よ」「か」「の」「な」と、轟木、大島論文にはないが、音形に注意すべき終助詞相当表現として「でしょ(う)」と「じゃない・じゃん」、そして、いわゆる「とびはね音調」の「ない」をとりあげる。

用例は郡(2016a)で用いた資料の中の親しい者どうしの会話を主とし、「⑩1987f」の形で同論文での資料番号と話者の生年と性別を示す。⑩は新資料で、世田谷区育ち1986年生まれの男性と、友人で多摩市育ち1986年生まれの女性の独自収録の会話(2008年)である。

高さの動きの記述の枠組みは、文内イントネーション(アクセントの実現度の強弱)は郡(2003)、末尾イントネーションは郡(2015a)とその改訂版である郡(2016a)のものをを用いる。

1) 宇野義方氏(1955)の日常談話資料では「ね」「よ」「の」「か」「ねー」の順になるという(「ね」の長短を別扱いしている)。遠藤織枝氏(2002)の雑談での会話資料では、男女とも「ね」が圧倒的に多く、男女の合計では、その後「よ」「か」「の」「な」と続く。

用例は表音カナで表記し、以下の記号を高さ変化の開始点にもっとも近いところに付ける。
「: アクセントによる上げ, ː: アクセントによる下げ, ||: イントネーション句の切れ目,
/: ポーズ, /: 疑問型上昇調(連続的上昇), ↑: 強調型上昇調(段状上昇), →: 平坦調, ↗: 上昇下降調, ↓: 急下降調, p: 音の上がり方が小さい, f: 音の上がり方が大きい²⁾。

なお、終助詞類の用法の分類とラベルは暫定的なものである。

2 終助詞類の高さの動き：アクセントとイントネーション

終助詞類の高さの動きにはアクセントとイントネーションが入りまじっている。

助詞・助動詞や接尾辞的形式のアクセント(各形式ごとに定まった高さの動き)は、3つの要素から成り立っている。ひとつは、①その直前の形式のアクセントとの支配・従属の関係で、これは助詞・助動詞などの側から見れば「協力型³⁾」「乗っとり型」「乗っとられ型」に分類できる(郡 2015b)。もうひとつは、②直前にどのような高さで接続するかで、「順接」と「低接」がある⁴⁾。これは「協力型」の場合に問題になる。さらに、③2拍以上のものについては、その内部に下げがあるか、あるならどこかということがある。本稿の範囲では、「よ」の一部と「の」、そしてとびはね音調の「ない」以外は順接の協力型である。

そして、その上に、文末のイントネーションとして疑問型上昇調、強調型上昇調(か平坦調)、上昇下降調(か急下降調)、または無音調がかかる。その長短や上昇の大小の違いも意味の微妙な違いをあらわすことがある。

3 「よ」

「よ」は、「もう遅いよ」「違うよ」のように、**わからせたい気持ちを込める**手段のひとつととらえることができる。自分が伝えたいことがらに相手が気づいていないとか、わかっていないという気持ちがあるときに使う。したがって、なくても伝達内容は変わらない。

「よ」のアクセントは協力型だが、高さの接続の型として順接の使い方と低接の使い方の両方があることが特徴的である。イントネーションの使い方も「ね」とはかなり違う。典型的なのは、順接させて疑問型上昇調を付ける言い方と、低接させて無音調のままにする言い方である。このうち、順接の疑問型上昇調は、やさしく教えるように言う場合や、

2) 末尾イントネーションの p は上昇量が 4.5 半音以下, f は上昇量が 9 半音以上とした。ただ, p と f は文中でのアクセントの上昇の大きさについても使っており, それは前後との関係を考えての相対値である。二重基準になっているが, ここではこの形にする。

3) 「協力型」とは, すぐ前の語のアクセントを生かす形で付き, 自分自身のアクセントは弱まるタイプ。「まで」「です」が典型で, 「最後まで」なら [「サ」イゴ] + [「マ」デ] ⇒ [「サ」イゴマデ] または [「サ」イゴ「p」マ「デ」] となり, 「最初まで」なら [「サイ」ショ] + [「マ」デ] ⇒ [「サイ」ショ「マ」デ], または強調した場合などには [「サイ」ショ「マ」デ] となる。「乗っとり型」と「乗っとられ型」は注 29 で説明する。

4) 順接は, 自分自身の意味を強調する場合を除き, 直前の形式(概ね, 語)のアクセントの動きを受け継いで接続する型である。低接は, 直前形式にアクセントの下げがなく高ければ, それより一段低く付くが, 直前形式に下げがあつて最後がすでに低ければ, それ以上積極的に下げるということはない。

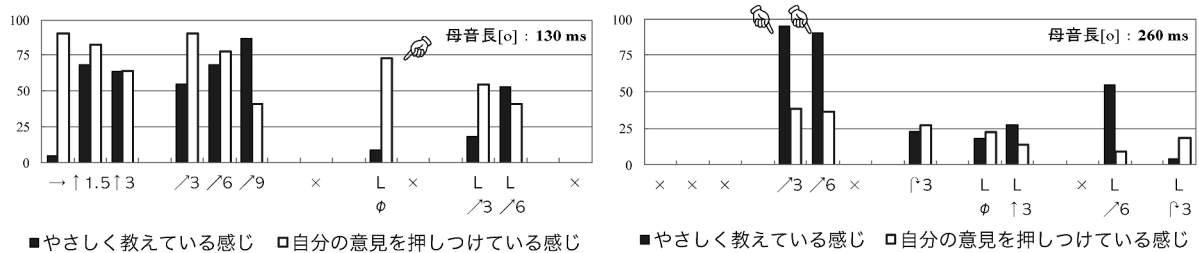


図1 「よ」の合成音声の聴取実験結果（縦軸は、そのように聞いた回答者数[%]）

聞き手の反応を待つ場合に多く選ばれる。低接の短い無音調は、断定的な言い方、特に、一方的な通告として言う場合や、相手の意見と違うことを強調する場合に多く使われる⁵⁾。

このことは図1からも傾向として確認できる。この図は、「もう夕方だよ」の「よ」の高さの動きと程度、母音の長さを変えた複数の合成音声を用意し、「やさしく教えている感じがするか」「自分の意見を押しつけている感じがするか」を首都圏中央部成育の大学生・大学院生と社会人、計22名にたずねた結果である（調査と結果表示の方法は郡2016b参照）。

疑問型上昇調を付けるとやさしい言い方になるというのは、裸の文末にも、終助詞の「ね」にも、間投助詞にもある。疑問型上昇調の主な使い方には、④答えを求める、⑤反応を待つ、⑥自分が思っていたことと違うという気持ちをあらわす、の3つがあると私は考えるが、⑤の相手の反応を待つ言い方にすることで、断定的で一方的な「きつい」言い方でなく、口調をやわらげた「やさしい」言い方になるものと思われる（郡2018）。

次に、「よ」のイントネーションの使い方を、型別に会話の実例とともに見ていく。

●「よ」の疑問型上昇調（順接）

やさしく教える、相手の反応を待つ

|| ス「fゴ」イ ム「pカシダ」ヨ || （〈そんなことがあったのは〉すごい昔だよ：⑨1972f1）

|| 「ン」ー 「fソ」ーダト オ「pモ」ー「fヨ」ー || （うん、そうだと思うよ：⑨1972f1）⁶⁾

●「よ」の疑問型上昇調（低接）

「よ」に疑問型上昇調を付けるとき、順接させてから付ける言い方のほかに、低接させてから付ける言い方もある。轟木(1992)は、どちらも機能に違いはないとしている。

|| 「モ」ー || 「ゼンゼ コレ || 「イ」ミ フ「pメーダ」ヨ || （〈自分だけクイズのヒントを見ながら〉もうこれ全然意味不明だよ：⑨1972f1）

5) それぞれの型が使われる頻度は場面によるところが大きいので、参考にしかないが、郡(2016a)の120分の会話資料では、136例の単独形の「よ」（「よね」等の複合形ではなく）のうち、無音調が67%と多く、強調型上昇調・平坦調が18%、疑問型上昇調が12%になっている。順接か低接かの判断はいつでもできるわけではないので、内部のイントネーションの分類結果だけをあげた。

6) この例では、もともとアクセントの下げがある「思う」に「よ」が付いているので、「よ」が順接か低接かは本当はわからない。ただ、直前にアクセントの下げがない場合を考えると、順接の方がふつうの言い方に感じられるようなので（轟木靖子1992bの表2-1に、低接の疑問上昇と強調上昇は、実際には順接となることが多いという説明がある）、ここでは、はっきりしない場合は便宜的に順接に含めた。

●「よ」の強調型上昇調と平坦調（順接）

わからせたい気持ちを込める

|| ニ「カ」ショダ↑pヨ || ニ「p」カ「ショ」 || （〈4つに切れたネックレスを2箇所でつなぐというクイズの指示を相手に再認識させるために〉2箇所だよ、2箇所：⑩1987f）⁷⁾

|| コ「チラデ」ス→ヨー || （〈離れた人に声をかける〉こちらですよ：平坦調で伸ばす言い方）

●「よ」の上昇下降調と急下降調（順接）

わからせたい気持ちを強く訴えかける

|| ワ「カ」ンナイ↑pヨー || （〈答えがわからないので助けを求めて〉わかんないよ：⑩1987f）

|| ヨ「コ」ヤマ「ユ」ーダ↑pヨー || （〈誰の話をしているのか聞き手が認識できていないようなので、思い起こさせようとして〉横山裕だよ：⑨1972f1）

〈補足〉郡（2016a）の会話資料では上の2例のみ。少し子供っぽい言い方のようで、合成音の聴取実験結果では、「もう夕方だよ」の「よ」の急下降調は22名のうち55%が、そして3半音の上昇下降調は64%が、6半音の上昇下降調は55%が「子供っぽい言い方の感じがする」と聞いている。

●「よ」の無音調（低接）

わからせたい気持ちを込める（断定的・一方的）

|| 「エ」 || / || ア「レダ」ヨー「p」ナ「ンカー」 || / || 「クーチュー」 || / || ア「ル」ク ヤツジヤナ／イ || （〈相手も当然知っていると思って話し手が話し始めたが、相手が知らないと言ったので〉え、あれだよ、なんか空中歩くやつじゃない：⑩1986f）

|| 「サ」ンジュー || 「ニ」ダヨ || （〈ある人の年齢が32だと知って驚いた相手が「32なの？」と確認を求めたのに対し、そのとおりだの意味で〉32だよ：⑨1972f2）⁸⁾

|| 「カンガ」エロヨ || （考えろよ：⑩1986m）

4 「か」

「か」は(1)答えを求めるのに使うのが基本である。ただ、答えを求める気持ちは弱いこともあり、(2)「はあ、そうでしょうか」のように疑いの気持ちを込めるだけの使い方や、(3)「あ、そうか」「そうですか、わかりました」のように、自分が知らなかったことがらを今知った、あるいはあらためて知ったことを伝えるだけに近い使い方もある。そうした場合でも、「はい」と答えることができる。

「か」のアクセントは順接の協力型である。イントネーションは答えを求める気持ちが

7) ここで「よ」はもともとアクセントの下げがある「2箇所」に付いている。したがって、ここからはこの「よ」が順接だとは断定できない。しかし、「2箇所」ではなく、アクセントの下げがない「両方だ」には、その最後から一段上がる形で「よ」が付くのがふつうのようなので、「2箇所」の場合も「よ」は順接だと推定する。次の「そうだよ」と「こちらですよ」も同様の方法で順接だと推定する。

8) この例では、もともとアクセントの下げがある「32だ」に「よ」が付いているので、この「よ」が低接だとは断定できない。しかし、「32だ」ではなく、アクセントの下げがない「33だ」には「よ」は低く付くので、「32だよ」の場合も「よ」は低接だと推定できる。次の例の「考えろよ」については、積極的に推定できる根拠ではないが、有無を言わせない言い方であることから、低接だと考えておく。

強いときは典型的には疑問型上昇調だが、裸の文末の場合ほど上昇が大きい必要はない⁹⁾。むしろ、上昇が大きいと詰問することになりかねない。丁寧体の「ですか・でしたか？」とか「ますか・ましたか？」では強調型上昇調が多く¹⁰⁾、「いつですか？」のように疑問詞がある場合は、無音調も使われる。

答えを求める気持が弱い場合は、無音調のことが多いようだ。自分が知らなかったことがらを今知った気持ちを込めるときは、上昇下降調や急下降調もある。これは、裸の文末で「本当」や「なるほど」に付ける上昇下降調や急下降調の使い方と同じである。郡(2016a)の120分の会話資料では、疑問型上昇調の「か」は実はほとんどない¹¹⁾。

●「か」の疑問型上昇調（順接）

(1) 答えを求める

|| コ「レ」ッテ || コッ「チノ」ワ || ナ「p」ンモ「ソ」ーサシ「p」ナ「ク」テ「p」イ「ー」デス／カ
|| (〈録音機について〉これって、こっちのは何も操作しなくていいですか？：⑩1986f)
|| 「ド」コノ「p」シュ「ジュツ」ダッタデス／fカ || (どこの手術だったんですか：③1933f)

●「か」の強調型上昇調（順接）

(1) 答えを求める

|| 「カ」ザッチャ「ウン」デス↑fカ || (〈正月飾りを22日か23日に準備するという相手の話に
対して、[あなたの家では、もうその頃に]〉飾っちゃうんですか：⑧1907f)

●「か」の上昇下降調・急下降調（順接）

(3) 自分が知らなかったことがらを今知った、あるいはあらためて知ったことを伝える

|| 「ソ」ッカ || コ「コ」カー || (〈疑問が氷解して〉そうか、ここだったのか：⑨1972f1)
|| 「ア」ー || ア「レ」カ↓ー || (〈誰の話かがやっとわかって〉ああ、あれか：⑨1972f2)

●「か」の無音調（順接）

(1) 答えを求める

|| 「ド」レニシ「p」ヨ「ー」カ || (どれにしようか：⑩1987f)
|| テ「ツ」ダイマショ「ー」カ || (手伝いましょうか)

(2) 疑いの気持ちを込める

|| ハー / 「ソ」ーデショ「ー」カ || (〈ほめられて〉はあ、そうでしょうか：③1951m)

(3) 自分が知らなかったことがらを今知った、あるいはあらためて知ったことを伝える

|| コレワ「ラジ」ナンデスカ || (〈写真に写っているのはわらじだという内容の相手の発言を受けて〉これ、わらじなんですか：①1933f)

9) 郡(2017)で報告した「村山さんですか」の聴取実験の結果にもとづく。

10) 郡(2016a)の120分の会話資料では、質問かどうかにかかわらず、丁寧体に付く「か」の42例のうち、強調型上昇調が18例で、疑問型上昇調は3例である。あとは無音調。

11) 郡(2016a)の120分の会話資料では74例の単独形（「かな」等ではない）の「か」のうち、無音調が64%、強調型上昇調・平坦調が24%になっている。疑問型上昇調は4例のみ（うち3例は丁寧体）。

5 「の」

終助詞の「の」には、(1)「今はだめな**の**」のように、**相手は知らないと思われることを伝える**ときの使い方(=のだ)と、(2)「まだだめな**の**」「どうな**の**」のように、相手は知っていると思われるが**自分はよく知らないことについて確認の答えを求めたり**、疑問詞をとともに**情報を求める**使い方(=のか)がある。名詞や形容動詞語幹には「なの」の形で付く。

終助詞「の」のアクセントは低接の協力型である¹²⁾。イントネーションは、(1)相手が知らないと思われることを伝えるときは無音調である。ただ、それにぜひわからせたい気持ちを込めるときは強調型上昇調になる。一方、(2)確認の答えや情報を求める意味では、疑問型上昇調が典型的である。しかし、この意味で強調型上昇調が使われることがあるし、無音調のこともある。以上は実は裸の文末でのそれぞれのイントネーションの使い方と基本は同じである¹³⁾。(1)の使い方では、「(な)の」がなくても伝達内容は変わらない。

●「の」の疑問型上昇調（低接）

(2)自分はよく知らないことについて確認の答えや情報を求める

|| ヤ「メテ クレッ¹テ ユ「p ワレタ¹ノノー || (やめてくれって言われた**の**? : 女性)

|| コ「タ¹エ || シッ「fテ¹ンノpノ || (答知って**んの**? : ⑩1987f)

●「の」の強調型上昇調（低接）

(1)相手は知らないと思われることを、わかってほしい気持ちを強く込めて伝える

|| イ「ヤ¹ナ↑ノ || (いやな**の**)

|| オ「トナ¹シク || シ「テル¹ノ↑ー || (〈親から子供に〉おとなしくしてる**の** : 女性)

(2)自分はよく知らないことについて確認の答えや情報を求める

|| ジャ オ「ソ¹ージモ ヤッ「p テ¹ン↑ノ || (〈自分で〉じゃ、お掃除もやって**んの**? : ⑥1933f)

●「の」の無音調（低接）

(1)相手は知らないと思われることを伝える

|| ア「タシヨ¹リ || ナ「ナ¹ツ ウ「p エナ¹ノ || (〈夫の年齢は〉私より七つ上な**の** : ①1903f)

|| 「カ¹レワ || スッ「ゴ¹イ || ス「キ¹ナノ || (〈三国志を〉彼はすごい好きな**の** : ⑨1972f1)

(2)自分はよく知らないことについて確認の答えや情報を求める

|| エ「ホント¹ニ || ナ「グ¹ッタノ || (え、本当になぐった**の**? : ⑩1987f)

|| 「ダ¹レガ 「p ミ¹テンノー || (〈反語として：あんな番組を〉誰が見て**んの**? : ⑨1972f2)

6 「な」

「な」の特徴的な使い方は「裏切った**な**」「もうだめだ**な**と思った」のようなもので、自

12) 「有名な」「きれいな」など平板型の形容動詞に低く付くことから低接と見る。

13) 郡(2015a)参照。なお、郡(2016a)の120分の会話資料では122例の単独形の「の」のうち、無音調が61%、疑問型上昇調が30%、強調型上昇調・平坦調が8%になっている。

分はそのときこのように判断したという気持ちをあらわす働きをしていると考えられる。このほかに、「ね」の男性版として、話し手と聞き手との間で情報や気持ちが一致するように話をもっていく手段としての使い方もある。また、「子供は来るな」のような禁止の「な」もある。以下の例は、最初にあげた使い方と思われるものである¹⁴⁾。

●「な」の疑問型上昇調（順接）

|| ア「レ || / || 「f ミ「テテ || 「ナ「ンカ || ヘ「タ「ダ／p ナー「ト オ「p モ「ッテタカラ ||
 （俳優の演技について）あれ見てて、なんか下手だ**な**と思ってたから：⑨1972f1）

●「な」の強調型上昇調と平坦調（順接）

|| キ「ニ ナ「ル→ナー || （く答えがわからないので）気になる**な**：⑩1986f）

●「な」の上昇下降調と急下降調（順接）

|| 「ク「モダッテ「p ネー || / || 「ズ「イブン || 「シュ「ルイガー || / || チ「ガウ「ンダ
 「p ナー || （蜘蛛だってね、ずいぶん種類が違うんだ**な**：⑧1911m）

●「な」の無音調（順接）

|| イ「ヤ「ナ 「p ク「イズダナ コ「p レ || （いやなクイズだ**な**、これ：⑩1986m）

7 「でしょう・でしょ」

「でしょう」は、たとえば「トマトはたぶん野菜でしょう」[ヤ「サイデショ「ー]、「間に合うでしょうけど」[マ「ニア「ウデ「p ショ「ー・マ「ニア「ウデショ「ー]のように、推測や予想をあらわしたり断定をやわらげる使い方がすぐ思いつく。助詞なし文末では短く「でしょ」にもなるが、「野菜でしょ」なら[ヤ「サイデショ]とも[ヤ「サイデ「ショ]とも言う。

しかし、これを別の意味で使うことがある。「あなたはあなた、私は私**でしょ(う)**」[ワ「タシデショ(一)・ワ「タシデ「ショ(一)]、「京都に銀閣寺ってある**でしょ(う)**」[「ア「ルデショ(一)]のような言い方である。これは、話し手が事実だと考え、相手もわかっているはずだと考えることを相手に**思いおこさせる**働きをしている。次節で説明する「じゃない・じゃん」と違い、そんなこともわからないのかととがめる気持ちや、自説を押しつける気持ちが入ることがある。

思いおこさせの「でしょ(う)」は終助詞に近い性質を持っている。もともと推測・予想・やわらげの「でしょ(う)」も、「です」とは異なり動詞の終止・連体形に直接付きうることから（「間に合うです」とは言えないが「間に合うでしょ(う)」はよい）、終助詞と共通の性質を持っていると言える。思いおこさせる意味の「でしょ(う)」は、その後に助詞の「から」「けど」を続けることもできず文末でのみ使う点でさらに終助詞に近い。

思いおこさせの「でしょ(う)」を終助詞的相当表現と考えると、上の音形からすると、アクセントは順接の協力型で、「で」の後に下げを持つ言い方と持たない言い方があるとい

14) 郡(2016a)の120分の会話資料には禁止の用例はなかったが、判断の表明用法以外も含めて122例の単独形の「な」のうち、強調型上昇調・平坦調が37%、無音調が33%、上昇下降調が26%になっている。

うことになる。イントネーションは、確認の答えを求める気持ちが強く加わる時は疑問型上昇調を付ける。思いおこさせたい気持ちが強い場合は強調型上昇調もある¹⁵⁾。以下の例は、思いおこさせの使い方と思われるものである。

●「でしょう・でしょ」の疑問型上昇調（順接）

|| オ「ソ」バモ「ネー || 「コ」ムデノ「ショー || / || 「ダ」カラ || 「ミンナ || ヨ「ヤクニ ナ」
ツチャ(...) || (〈年越し蕎麦が予約制なのは当然だという趣旨で〉お蕎麦もね、込む**でしょう**。
だから、みんな予約になっちゃ(？ってんのよ) : 「でしょ」の後に相手の応答なし, ⑧1907f)

●「でしょう・でしょ」の強調型上昇調（順接）

|| ソ「ノ シタ」ガ コー || トーリ「ン」ナ「ッテルデ↑f ショ || (〈自分の家について、裏
の縁側の〉その下が、こう、通りになってる**でしょ** : 相手は「うん」を繰り返す, ⑧1907f)

●「でしょう・でしょ」の無音調（順接）

|| ナ「ンシュウカ || 「スッ」ゴ「イ レンゾクデ イ「p ラ」シタ コト 「p ア」ッタ**デショ** ||
(何週か、すごい連続でいらしたことがあった**でしょ** : 相手の応答は「はい」[「ハイ」], ⑤1933f)
|| チ「ガ」ウ**デショ** || 「イ」ミガ チ「p ガ」ウヨ「p ネ || (〈相手の発言に対して〉違う**でしょ**,
意味が違うよね : 相手の応答なし, ⑩1987f) ¹⁶⁾

8 「じゃない」と「じゃん」

「じゃない」は、本来は「それはお酒であって水じゃない」[ミ「ズジャナ」イ]とか「やりたくてやったんじゃない」[ヤッ「タ」ンジャ「ナ」イ]のような否定表現である。それを質問（否定疑問）にするなら「水じゃない？」[ミ「ズジャナ」イ？]や「やったんじゃない？」[ヤッ「タ」ンジャ「ナ」イ？]である。「じゃ」は「では」[デ「ワ」]の縮約形であり、伸ばすときは[「ジャー」]という音形で使われることから、「じゃない」のアクセントは潜在的には「じゃ」の後に下がり目がある[「ジャ(「」)ナ「イ」]だと考えることができる。

ところが、「じゃない」には否定以外の使い方がある¹⁷⁾。たとえば、「味がしないんだっ

15) 郡(2016a)の 120 分の会話資料では、単独形（後に助詞が付かない形）の「でしょう・でしょ」はすべての用法をあわせて 62 例あり、そのうち疑問型上昇調が 35%、強調型上昇調・平坦調が 35%、無音調が 26%になっている。思いおこさせの意味での上昇下降調は方言的な言い方に感じられる。

16) 「違うでしょ」で「でしょ」の前で下がっているのは、「違う」などいわゆる平板型の動詞は、「でしょ(う)」の他、「ね」「か」が付く場合は、尾高型としてふるまうためと考えられる(轟木 1995 参照)。

17) 主に音声の研究の立場からの先行研究として、御園生保子氏(2000)は、打ち消しの意味がないものを文末詞とし、文末詞には下降調も上昇調もあると言い、三木理氏(2008)は先行研究を整理した上で（後述の三枝 2004 は含まない）、「否定」と「否定以外」に大きく分け、「否定以外」を「事実上の肯定」（文末下降）と「推量・確認要求」（文末上昇）に分けている。

音声を中心に据えた研究ではないが、高さの動きを考慮した三枝令子氏(2004)は、「イントネーション」、(先行する)「の」の有無、意味の違いを手がかりに、「確認」「強め」「気付かせ」の 3 分類を提示している。氏の各例文に対するイントネーション付けは、内省によって典型的と見なした言い方かと思われる。氏はイントネーションを上昇調と下降調のふたつに分けているが、それぞれが音として何を指して

たら水じゃない？」[ミ「ズジャ¹ナイ／ー」]や「本当はわざとやったんじゃない？」[ヤッ「タ¹ンジャナイ／ー」]のような表現である。これは、「水だ」「わざとやったんだ」という肯定文であらわされる内容を自分の判断として示し、それを相手に特に押しつけないようにしながら同意を求める言い方である（＝じゃないか）。

[ミ「ズジャ¹ナイ／ー」]という音形（以下、A 形）は、否定の[ミ「ズジャナ¹イ」]に「アクセントなし疑問型上昇調」¹⁸⁾を付けて「ない」のアクセントをなくすことで、「じゃ」の後の潜在的な下げを顕在化させたものと考えられる。同じ意味の質問で[ミ「ズジャ／ナイ」]という音形（B 形）もある。これは「じゃ」の後の下げをもなくす形で「アクセントなし疑問型上昇調」を付けたものと考えられ、A 形よりも新しい言い方のようだ¹⁹⁾。そしてこの B 形は、次節で説明する「とびはね調」と表面的には同じ音形になる。

さらに、質問ではなく、「なんだ、お酒かと思ったら、ただの水じゃない」[ミ「ズジャ¹ナイ」]や「何度も言ったじゃない」[イッ「タ¹ジャナイ」]のような、肯定文であらわされる内容を自分の判断だという気持ちを込めて伝えるときの使い方がある（＝じゃないか）²⁰⁾。この場合の音形は、アクセントなし疑問型上昇調を付ける質問、つまり、肯定文であらわされる内容を自分の判断として提示して、それに対する同意を求める言い方の A 形（[ミ「ズジャ¹ナイ／ー」]）から、疑問型上昇調の部分、すなわち同意を求める部分を取り去って、自分の判断を提示する部分だけを残したものと考えることができる。

いるのかの説明がないため詳細がわからないものの、私にはそれ以外のイントネーションもじゅうぶん可能と思われる例がいくつもある。谷部弘子氏(2016)は、「命題確認」か「知識確認」かを手がかりに自然会話データを分析している。結果として「じゃない」は上昇調の例が多く、「じゃん」は大半が非上昇調だとするが、やはりイントネーションの認定基準の詳細がわからない。氏の「非上昇調」には「下降調」と「下降調」でないものが含まれているようだが、このうちの「下降調」というのは私が言う上昇下降調を指している可能性がある。そう考えれば、私のデータと同じ傾向になる。

18) 「アクセントなし疑問型上昇調」とは私が仮に名付けたものだが、自分の考えに相手が同意するかどうかを特に自説を押しつけることなく聞くときに使うイントネーションである。文末要素のアクセントを取り去る形で疑問型上昇調を付ける。「じゃない」のほか、「形容詞の連用形＋ない」（例：かわいくない？[カ「ワイ¹ク／ナイ」]⇐[カ「ワイ¹ク「ナ¹イ」]）や形容詞の終止・連体形（例：涼しい？[ス「ズ／シー」]⇐[ス「ズシ¹ー」]）にも使われる。川上肇氏(1963)が文末の上昇調を整理した論考には言及がなく、登場したのはそれ以降の可能性はある。

19) 相手が自説に同意するかどうかを聞く場合にどちらを使うかを、若年から高年まで 8 名の首都圏成育話者に聞いた。判断に悩む話者が多かったが、中高年層は「やったんじゃない？」[ヤッ「タ¹ンジャナイ／ー」]のように、もともと下げがある語に「(じゃ) ない」を付けた上で「ない」だけにアクセント疑問型上昇調をかぶせる言い方は使いそうだと答える一方、「水じゃない？」[ミ「ズジャ／ナイ」]のような、もともと下げがない語に「(じゃ) ない」を付けてからアクセントなし疑問型上昇調をかぶせる言い方には違和感があると答える傾向が見られた。これは、後者が新しい言い方であることを示唆する。

20) わざわざ否定の形で言うのは、自分の判断が正しくない可能性があると思っていることをあらわすと考えることができる。そうした可能性を示しておけば、自分の判断を相手に押しつける「きつい」言い方にならず、もし相手と意見が違ってもたがいの気持ちの摩擦が少なくすむ。

否定ではなく自分の判断を伝える用法の「じゃない」は、終助詞に近い性質を持っている。「じゃない」の「ない」は本来は形容詞である。「安い」「わかってる」の否定なら「安くない」「わかってない」のように、「じゃ」なしで使う。しかし、自分が判断した内容を言うときには、「なんだ、すごく安くない」「あ、わかってない」ではなく、「なんだ、すごく安いじゃない」「あ、わかってる(ん)じゃない」と表現する。つまり、この使い方では「ない」は独立の語ではなく、「じゃ」と一体となって形容詞や動詞の終止連体形に付く形式になっている。過去の言い方も「ただの水じゃなかった」ではなく「ただの水だったじゃない」となる。また、この「じゃない」の後には助詞の「から」「けど」を続けることもできず、文末だけで使う。これらは終助詞と共通の性質である。そして、「ただの水じゃない」「わかってる(ん)じゃない」は「ただの水か」や「わかってるね」という言い方に近い。つまり、「じゃない」全体が終助詞に相当する形式になっていると見ることができる。

「じゃない」で自分の判断だという気持ちを込めると言っても、それに対する相手の応答のしかたを見ると、3つのタイプがある。それは、肯定文であらわされる内容を、

(1)意外な事実として認識したことを伝える（「なんだ、ただの水じゃない」「あ、安いじゃない」のように、自分が気がついていなかったこと〔ただの水だ・安い〕に今気がついたことを伝える：聞き手の応答が「知らなかった?」「気がついた?」などになる）、**(2)やさしく思いおこさせる**（京都に銀閣寺ってあるじゃない」「何度も言ったじゃない」のように、相手もわかっているはずのことや、考えればわかるはずのこと〔京都に銀閣寺というものがある・何度も言った〕を思いおこさせる：応答が「わかってるよ」「知ってるよ」「それがどうしたの?」などになる）、**(3)思いつきとして伝える**（「きょうは雪なんじゃない・雪でも降るんじゃない」のように、自信はないが可能性があると思ったこと〔雪が降る〕を伝える：応答が「そう思う?」などになる；名詞に「なんじゃない」、動詞・形容詞に「んじゃない」の形で付く場合はこの用法だが、「じゃない」のままのこともある）である。思いおこさせと思いつきの用法では、「味がしないんだったら水じゃない?」のように、その内容について、肯否判断、同意または確認を相手に求める気持ちを込めることができる。

「じゃない」と同源で、自分の判断を伝えるときに使う比較的新しい言い方に「じゃん」がある。さらに終助詞化が進んだ形である。音が伸びて「ジャーン」になることもある。

こうした「じゃない・じゃん」を終助詞相当表現と見ると、上に示した例からわかるように、アクセントは順接の協力型で、「じゃ」の後で下がる（「じゃ」が低ければ、その後特に下らない）。イントネーションは、私の会話資料での限られた用例から見ると、疑問型上昇調は自分の判断についての肯否を問う場合や同意・確認求めに使われる。無音調は意外な事実の認識表明か思いおこさせに使われる²¹⁾。上昇下降調は「じゃない」ではなく、「じゃん」に使われる²²⁾。

21) 郡(2016a)の120分の会話資料では20例の終助詞的「じゃない」のうち、疑問型上昇調が40%、無音調が35%、強調型上昇調・平坦調が25%となっている。

22) 郡(2016a)の120分の会話資料では、22例の「じゃん」のうち、無音調が45%、上昇下降調が32%。

●「じゃない・じゃん」の疑問型上昇調

||「ゴールデンウィークグ¹ライマデ ヤ¹p ル¹ンジャ¹／p ナイ || (〈話題になった映画はまだ上映中かどうかを聞かれて〉ゴールデンウィークぐらいまでやるん**じゃない**：返答は「ほんと？」，⑨1972f1 [思いつきと同意求め])

||デ「カ¹レワ「p ダ¹ッテ || オ¹ナ¹イドシジャ¹／f ナイ || (で，彼は，だって〈自分たちと〉同年**じゃない**？：⑨1972f1 [思いおこさせと確認求め]) 【図 2】

||「ソ¹ー「p ソ¹ー ||「マーロンブラ¹ンドシュエン↑デ¹ッテ コレー || / || ゴッ「ドファ¹ーザー／p ジャン || (〈『ゴッドファーザー』とつながりのある話を始める前に) そうそう，マーロンブランド主演でって，これ『ゴッドファーザー』**じゃん**：相手は「ん」とあいづちを打つ，⑨1972f1 [思いおこさせと確認求め])

●「じゃない・じゃん」の強調型上昇調

強調型上昇調と言っても，「浮き上がり調」，つまり強調型上昇調の一種で，最後の重音節全体が高い言い方になる。

|| イッ「コズ¹ツシカ ハ¹p コベナ¹イ ↑p ジャン¹ シタラ || (〈相手の説明を聞いて，それにコメントする〉1 個ずつしか運べない**じゃん**，[そ] したら：相手の反応を待たず，コメントした理由を説明し始める，⑨1972f1 [意外な事実の認識表明])

||「ジョーシマクン ||「サ¹ンジュー キュ¹p グ¹ライジャ ↑p ナイ || (〈城島くんの年齢を相手に聞かれて〉城島くん 39 [歳] ぐらい**じゃない**：相手は「すごいよね」と応答：⑨1972f1 [思いつき])

●「じゃん」の上昇下降調

|| カン「タン「p ジャン || (〈クイズの答えを知って〉簡単**じゃん**：話し相手の応答は，否定の「簡単じゃないよ」[カン「タンジャナ¹イヨ]，⑩1986m [意外な事実の認識表明])

|| ド「レクライダ¹カ || ソーゾ デ「キ¹ナイ「p ジャン || (〈60g の CO₂ の量と言っても〉どれくらいだか想像できない**じゃん**：応答は「だね」，⑩1986f [思いおこさせと確認求め])

|| エ「ダ¹ッテ ||「サイショニ ヤ¹ギ イク「p ジャン || (〈相手がすでに理解していると思われる内容を思い起こさせて〉え，だって最初にヤギが行く**じゃん**：相手はそれを受けて「最初やぎを乗せて」と手順の確認を始める，⑩1987f [思いおこさせと確認求め])

〈補足〉この上昇下降調の使い方は，裸の文末でのものと同じ。3 例めの「行くじゃん」は無音調なら「イ「ク¹ジャン」となるが，上昇下降調のために「行く」の直後の下げが消えている。

●「じゃない・じゃん」の無音調

||「ナ¹ンダ ||「タ¹ダノ || ミ「ズジャ¹ナイ || (〈液体を飲んでみて，お酒ではないことを知って〉なんだ，ただの水**じゃない**：女性 [意外な事実の認識])

|| オ¹「モシロ¹イ ヨトカ ||「ウ¹ソジャン || (〈おもしろいと相手は言ったが実はつまらないとわかって〉「おもしろいよ」とか嘘**じゃん**：相手の返答なし，⑩1987f [意外な事実の認識])

||「セ¹ルフダト ||「キューユスル マ¹エニー || / || サ¹「ワル¹ジャナイ アノー「p ホーデンスル ヤ¹ツオ || (〈ガソリンスタンドでは) セルフだと給油する前に触る**じゃない**，あの放電するやつを：相手は「ああ，そっか」と返答，⑩1986m [思いおこさせ])

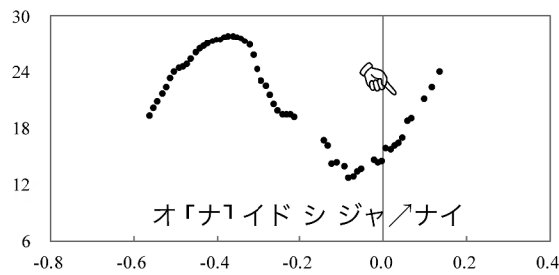


図2 思いおこさせと確認求めの「同い年じゃない？」

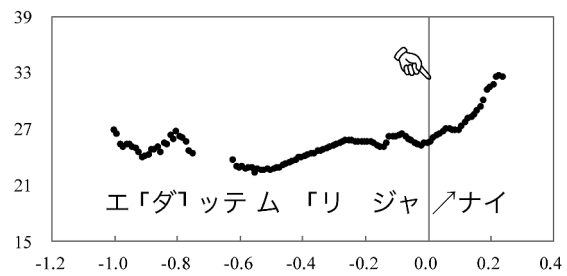


図3 とびはね音調の「無理じゃない？」

9 「とびはね音調」の「ない」

とびはね音調とは、たとえば「すごく**ない**？」を[ス「ゴク／**ナイ**】と言い、「無理**じゃない**？」を[ム「リジャ／**ナイ**】と言うように、形容詞の連用形や「名詞・形容動詞語幹＋じゃ」といった形の短文で使われるもので、高さの動きを、本来はアクセントの下げがある名詞・形容動詞語幹（「ムリ」）や形容詞（ス「ゴク」）でも下げをなくして平らにし、その後に「ない」をやはり下げをなくした形で付け、さらにその「ない」に疑問型上昇調を付ける言い方である²³⁾。最後の上げの開始は「ない」の冒頭のこともあれば、その内部のこともある。上げずに[ス「ゴクナイ」][ム「リジャナイ」]だけの言い方もある（下の例の最後）²⁴⁾。

|| ス「ゴク**ナ**／**イ** || （〈鳥を見て〉）すごく**ない**？：相手の直接の反応はない：若年層男性）

|| エ「ダ」ッテ || ム「リジャ／**ナイ** || （〈クイズを解くのがむずかしいと相手が言ったのに対して）え、だって無理**じゃない**？：相手からの直接の反応はない，⑩1987f）【図3】

|| 「オ」ーカミト 「p キャ」ベツニ ス「p レ」バ 「p イーン」ジャ**ナイ** || （〈クイズの解法を考えながら）狼とキャベツにすればいいんじゃない？：相手の直接の反応はない，⑩1987f）

この言い方は、8 節で説明した「アクセントなし疑問型上昇調」に似ている。あらわす意味としては、自説を押しつけない同意要求という要素がある点と同じである。違いは、とびはね音調は返事を求めることよりも、むしろ**相手の反応をうかがいながら、自分が感じたことを断定することなく伝える**ことに主眼があるように思われることである。実際、上の例のように、相手は何も返事しないことがよくある。平成期から盛んに使われはじめた言い方で、「半疑問イントネーション」（文節末での疑問型上昇調）とともに、口調やわらげを共通の特徴とする「平成イントネーション」と言える²⁵⁾。

23) 田中ゆかり氏(1993)が最初の本格的な報告で、同氏の一連の研究が田中(2010)にまとめられている。なお、田中氏は最後の上げを「浮き上がり調」としているが、これは提唱者の川上肇氏(1963)が言う意味での浮き上がり調ではない。川上氏の浮き上がり調は「文の最後から二番目の拍において既にほとんど上昇が完了し、あとはほぼ平らのまま文が終る」もので、典型的なとびはね音調の上昇とは異なる。

24) すると、とびはね音調の本質は、「ない」の直前のアクセントが平板化するというところにあると見ることができる。郡(2017)ではこのことを「速くない」の聴取実験の結果にもとづいて報告した。

25) とびはねも半疑問も疑問型上昇調を使うが、質問性は薄い。3 節で述べたように、疑問型上昇調を使うことで、断定的で一方的な「きつい」言い方でなく、口調をやわらげた「やさしい」言い方になりう

とびはね音調とアクセントなし疑問型上昇調の音形としての共通点は、文末要素(「ない」)のアクセントを取り去る形で疑問型上昇調を付けることである。しかし、相違点もある。8節で述べたように、アクセントなし疑問型上昇調を「水じゃない？」に付けた言い方には(A) [ミ「ズジャ」ノナイー] と(B) [ミ「ズジャ」ノナイ] がある。B形は、典型的なとびはね音調の「無理じゃない？」[ム「リジャ」ノナイ] の音形と表面的には同じである。しかし、[ム「リジャ」ノナイ] は「無理」[「ム」リ] のアクセントの下げをわざわざなくしたもので、B形の [ミ「ズジャ」ノナイ] では「水」にアクセントの下げがもともとない点が異なる。そして、B形は、[ム「リジャ」ノナイ] のような言い方の発生以前からあるようだ²⁶⁾。つまり、表面的には同じでも、[ム「リジャ」ノナイ] のように「(じゃ) ない」より前の語のアクセントをもなくす典型的なとびはね音調は、アクセントなし疑問型上昇調の B 形より新しく、両者は区別するのが妥当であろう。ここでは、「(じゃ) ない」より前の語のアクセントをもなくす方の言い方を**純とびはね音調**と呼ぶことにする²⁷⁾。[ミ「ズジャ」ノナイ] のようなアクセントなし疑問型上昇調の B 形は、「純」ではないが) とびはね音調の使い方もできる。

純とびはね音調の「ない」は終助詞的な性質を持っている。「ない」は本来は形容詞だが、純とびはね音調は「なかった」には付けられず、「ないから」「ないけど」など次に助詞を続けた形にも付けられない。つまり、純とびはね音調の「ない」は形容詞性が希薄で、文末でのみ使われる。これを終助詞相当表現と見ると²⁸⁾、「ない」の直前の語のアクセントの下げをなくすことと、「ない」自体が平らなまま終わってもよいことから、アクセントとして「乗っとり型」²⁹⁾で内部で下がらないタイプになっていると考えることができる^{30, 31)}。

る。その意図がとびはね音調の使用にも半疑問イントネーションの使用にもあるように思える。とびはね音調の場合は、さらに否定の形を使うことで、聞き手と意見が違う可能性があると思っていることをあらわし、そのことでも「きつい」言い方になることを避けていると考えることができる(注 20 参照)。

26) 8名の首都圏成育話者に聞いたところ、中年層話者は、[ム「リジャ」ノナイ] は使わないが、[ミ「ズジャ」ノナイ] には違和感がないと答える傾向が見られた。

27) A 形に対する B 形の登場(注 19 参照)が純とびはね音調の成立のきっかけになった可能性がある。

28) 8節では、「無理じゃない？」で「じゃない」全体が終助詞的な形式と考えたが、純とびはねの場合は「かわいくない?」「無理じゃない?」に共通する「ない」だけを終助詞的形式と考える。

29) 「乗っとり型」は、すぐ前の単語のアクセントがどのようなものでも、それを乗っとして全体を助詞・助動詞のアクセント型に変えるタイプである。代表的なのが助動詞の「ます」である。「成る」[「ナ」ル] と「鳴る」[「ナ」ル] のアクセントの区別は、「ます」を付けると「成ります」[「ナ」リマ「ス」]、「鳴ります」[「ナ」リマ「ス」] で、前の語本来のアクセントの違いがなくなる。「ました」等も同様。他に「なさい」「つつ」がある。「だけ」にもこの用法がある。しかし、乗っとり型の終助詞類は他に見当たらず、なぜこの「ない」が乗っとり型になるのかの説明は簡単ではない。なお、「読まない」「呼ばない」(現在の主流形は[ヨ「マ」ナイ][ヨ「バ」ナイ])など、動詞の否定形を作る助動詞の「ない」は「乗っとり型」。

30) これは共時的な見方である。通時的には、自分の考えに同意するかどうかをたずねる言い方として以前からあった[カ「ワイ」クノナイ]や[「ム」リジャノナイ]の延長線上にある。以前からあるこの形はアクセントなし疑問型上昇調を「ない」だけに適用したものだが、これを「かわいくない」「無理じゃない」という「ない」を含む形式全体に適用したものがとびはね音調と見ることができる。

引用文献

- 宇野義方(1955)「イントネーションの調査」『談話語の実態』国立国語研究所, 15-51.
- 遠藤織枝(2002)「男性のことばの文末」『男性のことば・職場編』ひつじ書房, 33-45.
- 大島デヴィッド義和(2013)「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」『国際開発研究フォーラム』43, 47-63.
- 川上 蓁 (1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』(國學院大學) 16, 25-46.
- 郡史郎(2003)「イントネーション」『朝倉日本語講座 3 音声音韻』朝倉書店, 109-131.
- 郡史郎(2015a)「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』(大阪大学) 41, 85-107.
- 郡史郎(2015b)「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き—直前形式との複合形態の観点からの分類—」『音声言語の研究 9』(大阪大学) 63-74.
- 郡史郎(2016a)「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション—型の使い分けについて—」『言語文化研究』(大阪大学) 42, 61-84.
- 郡史郎(2016b)「終助詞『ね』のイントネーション」『音声言語の研究 10』(大阪大学) 61-76.
- 郡史郎(2017)「日本語イントネーションについてのいくつかの聴取実験」『言語文化研究』43, 249-272.
- 郡史郎(2018)「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション—使用例の検討と、尻上がりイントネーション、半疑問イントネーションの考察—」『言語文化研究』(大阪大学) 44, 283-306.
- 三枝令子(2004)「終助詞『じゃない』の意味と用法」『言語文化』(一橋大学) 41, 19-33.
- 田中ゆかり(1993)「『とびはねインネーション』の使用とイメージ」『日本方言研究会第 56 回研究発表会発表原稿集』59-68.
- 田中ゆかり(2010)『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.
- 轟木靖子(1992)「東京語の文末詞の音調と機能についての考察—『よ』を中心に—」『日本語・日本文化研究』(大阪外国語大学) 2, 51-60.
- 轟木靖子(1995)「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会報』208, 1-8.
- 轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会) 5-28.
- 三木理(2008)「韓国語を母語とする日本語学習者の『これじゃない』の発話意図とイントネーション—音響分析と聴取に基づく考察—」『言葉と文化』(名古屋大学) 9, 321-341.
- 御園生保子(2000)「文末に現れるジャンイの用法と韻律の分析をめぐる問題について」『日本語 意味と文法の風景』ひつじ書房, 343-355.
- 谷部弘子(2016)「日常談話にみる確認表現『ジャンイ』『ジャン』の実相」現代日本語研究会(編)『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房, 173-189.

31) 「困ってない」など動詞テ形へのとびはね音調の使用は首都圏中央部の若年層の意識として違和感はないようだ。また実際にも使用されているようだ(田中ゆかり氏私信)。しかし、先行研究では特に言及なく、私の会話資料にも出てこなかった。相対的に使用が少ないものかと思われる。もしテ形での使用を避けるような共時的な音声的要因があるとすれば、考えられるのは、この「ない」が乗っとり型の接尾辞的要素だということである。なぜなら、すでに「て」などの協力型の助詞・助動詞が付いた形式の後にさらに付く助詞・助動詞は、それが本来乗っとり型でも乗とられ型でも、協力型のふるまいをするからである(郡 2015 の表 2 参照:「成る」と「鳴る」のアクセントの区別は、乗っとり型の「ます」を付けるとなくなって、どちらも[ナ^リマ^ス]だが、「成ってます」なら[ナ^リッテマス],「鳴ってます」は[ナ^リッテマ^ス]で区別は保たれる)。乗っとり型の「ない」もテ形に対しては協力型になるならば、「困ってない?」は[コ^リマ^リッテナ^ノイ]か[コ^リマ^リッテ^pナ^ノイ]で、とびはね音調にならない。